

9. 厚生労働科学研究費補助金（免疫、アレルギー疾患政策研究事業）

分担研究報告書

季節性アレルギー性鼻炎の診療実態と経済的影響等の解明のための研究

分担研究者 櫻井 大樹 山梨大学大学院総合研究部医学域 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 教授

研究要旨

本研究では、季節性アレルギー性鼻炎（花粉症）の診療実態を明らかにするため、山梨県内の耳鼻咽喉科医療機関において Web アンケートを実施した。3,795 人の回答を得て、患者の受診動向、症状の重症度、治療状況を分析した。結果、花粉症の症状は 3 月に最も多く、春季患者の 25% が秋にも症状を経験していた。原因抗原として、スギ、ヒノキが多く、次いでブタクサ、イネ科の自覚が多かった。春季は重症以上の患者が 3 割以上いたが、秋季は症状が軽い傾向にあり、症状があっても医療機関を受診しない患者も多いことが明らかとなった。治療法としては経口薬や点鼻ステロイド薬の使用率が高かったが、舌下免疫療法や IgE 抗体治療の導入率は低かった。スギ・ヒノキ以外の花粉症に対しても患者の認識と治療の充実が、花粉症診療のさらなる発展につながる可能性があり、花粉症の包括的な治療・診療方針の検討を進めることが重要と考えられる。

研究協力者

松岡伴和 山梨大学大学院総合研究部医学域 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 病院准教授
島村歩美 山梨大学大学院総合研究部医学域 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 臨床助教

A. 研究目的

本研究では、季節性アレルギー性鼻炎（花粉症）の診療実態を明らかにすることを目的とする。特に、患者の受診動向、症状の重症度、治療内容を調査することで、現状の診療の課題を把握し、今後の医療提供体制や治療戦略の改善に寄与することを目指す。

B. 研究方法

山梨県内の耳鼻咽喉科クリニック（山梨環境アレルギー研究会所属）および大学関連病院耳鼻咽喉科の 19 施設において、2025 年の春の花粉飛散期に花粉症で受診した患者を対象にアンケート調査を実施した。調査方法は、スマートフォンを用いた無記名の Web アンケート形式とし、患者は二次元バーコードを記載した PDF を自身の端末で読み取り、アンケートにアクセス・入力する形をとった。アンケートの冒頭には、研究参加への同意の有無を確認する質問項目を設け、同意を取得した。質問項目には、年代、性別、年間で花粉症の症状のある月、各季節の花粉の重症度、原因抗原、これまでの治療薬剤、舌下免疫療法の施行の有無などを含めた。なお、スギ・ヒノキの花粉飛散数は、中央市にある大学医学部の屋上で、ダーラム法による測定結果を参照した。（倫理面への配慮）

本アンケート調査は、山梨大学医学部倫理委員会の承認を得た上で実施された。

C. 研究結果

本研究では、山梨県内の耳鼻咽喉科医療機関において、2025 年春の花粉飛散期に花粉症で受診した患者 3,795 人を対象に Web アンケート調査を実施し

た。その結果、回答者の性別割合は、女性 52.3%、男性 47.7%であった。年齢別では、男性は 10 歳代が最も多く、次いで 20 歳代、40 歳代の順となった。一方、女性は 10 歳代が最も多く、次いで 40 歳代、30 歳代の順であった。

受診者数は、1 月から花粉飛散開始日（2 月 15 日）にかけて増加し、特にスギ花粉の飛散量が多い日の数日後まで受診者がさらに増加する傾向がみられた。花粉症の症状が現れる月としては、3 月が最も多く 95%の患者が症状を経験した。次いで 4 月（85%）、2 月（63%）、5 月（49%）と続いた。一方、7 月は症状を訴える患者が最も少なく 4%であった。春に症状のある患者の約 25%が秋にも花粉症症状を自覚していた。

自己申告による原因花粉では、スギ（82.2%）、ヒノキ（60.4%）、ブタクサ（30.4%）、イネ科（23.5%）

が主なアレルゲンとして報告された。症状の重症度については、春の花粉症では軽症が7.5%、中等症が62.2%、重症以上が30.3%であった。一方、秋の花粉症患者においては、軽症が44.8%、中等症が47.3%、重症以上が7.9%であり、秋の症状は春と比較して軽い傾向がみられた。

治療薬の使用状況としては、経口薬（漢方薬を除く）が最も多く使用され（80%）、次いで鼻噴霧用ステロイド薬（67%）、点眼薬（67.6%）が広く利用されていた。一方、舌下免疫療法（3.1%）、皮下免疫療法（0.5%）、IgE抗体治療（0.2%）の導入率は比較的低かった。

D. 考察

本調査結果より、春季には2月から5月に花粉症患者数が多いことが確認された。受診者数の増加がスギ花粉の飛散時期と関連しており、患者は飛散量の多い時期、特に大量飛散日後に受診を行う傾向があった。また、秋にも花粉症の症状を自覚する患者が一定数存在するが、その重症度は春と比較して軽い傾向にあり、秋の花粉症の認知度や受診率は春に比べて低いことが推察される。

治療状況については、経口薬および鼻噴霧用ステロイド薬の使用率が高いことが確認された。一方で、舌下免疫療法やIgE抗体治療といった免疫療法の導入率は低く、これらの治療法の普及には課題があると考えられる。

また、スギ・ヒノキ以外の原因抗原として、ブタクサやイネ科花粉の影響を受ける患者も一定数存在

することが分かった。これらの花粉に対する診療機会の確保や情報提供の強化が、今後の課題として挙げられる。

E. 結論

本研究を通じて、季節性アレルギー性鼻炎患者の受診動向、症状の重症度、治療内容に関する実態を明らかにすることができた。春の花粉症患者の約25%が秋にも症状を呈しており、秋季のなど春以外の花粉症診療の認知度向上や診療機会の改善が今後の重要な課題であることが示された。

また、治療の選択状況として、内服薬や鼻噴霧用ステロイド薬の使用率が高い一方、免疫療法の導入率は低いことが判明した。今後、さらに免疫療法の普及や治療選択の多様化が必要と考えられる。

さらに、スギ・ヒノキ以外の原因抗原に対する患者の認識と診療体制の充実が、花粉症診療のさらなる発展につながる可能性があり、花粉症の包括的な治療・診療方針の検討を進めることが重要と考えられる。

F. 健康危険情報

特記事項なし。

G. 研究発表

1. 論文発表：なし

2. 学会発表：なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

特記事項なし。